

「患者と思いを共有すること」これこそが医学の原点

関谷佳朗・東京都電動車椅子サッカー協会役員

昨年度の後期に続き、参加できることをとても嬉しく感じています。

お教室の広さに少しビックリしてしまいましたが、そのドキドキも講師の石川信義先生のお話をきいてるうちに紛れてきました。

毎回、僕の介助者兼通訳者兼解説者として参加してくれている さとちゃんにも今回の石川先生のお話は「自分が『ぶれていないこと』を再確認できた、とてもいい機会」だったようです。

医療や福祉の知識がまだまだ圧倒的に乏しい僕に対して、さとちゃんは僕の横でタイミングをはかりながら解説をしてくれる心強い存在なのです。

解説者のさとちゃんは今日も笑わせてくれました。
先生のお話のなかで「ライシャワー事件」が出てきました。

さとちゃんは「アメリカかどこかの駐日大使が精神障がいをもつ少年に殺された事件※が『ライスシャワー事件』だとノートに書いて僕に教えてくれました。

えっと

「ライスシャワー」って結婚式で新郎新婦をお祝いするためにお米をまくやつだったと思うのだけれど(・・)

帰りの電車のなかで笑いながら、「ライシャワー事件」を復習しました。

先生のお話のなかで、僕なりに気になったワードをいくつかピックアップしてみました。

「一度、亡くなった命だと思えば、大抵のことはできる」

新生児重症仮死状態で生まれたことにより、脳性麻痺の障がいをもつ僕も、同じことを考えています。

小学生の頃から、ボーイスカウトの一員として活動をして、決して自由とは言えない右手で野菜を切り、バーベキューセットで炒め、火力調整ができずに黒焦げになった焼きそばを食べました。

でも、そのおかげで、焼きそばを作るときの野菜や肉の分量が正確に分かりません。

以前、自立生活センターの「IL プログラム」に参加した際、カレーを一人分作るのにお肉を 200g 用意するといった方がいて、「僕より大食いでした！」とびっくりしたのですが、その方からしたら、経験したことがないことなので、分量が正確にわからなくても当たり前のことなのですね。

僕のモットー①は「できないことは、ない」です。

チャレンジ精神はいつでも持ち続けていきたいものです。

「こうでなければいけないということはない」

日常生活のありとあらゆることにヘルパーの手と足、場合によっては口(言語)を必要とする僕には介助方法のマニュアルはありません。

もちろんヘルパーとして(というよりは人として)最低限のモラルは持ち合わせていてほしいと思っています。

しかし、介助方法に関して言えば、「僕の利き手は右手だから、一般的に言えば、左側から洋服の袖を通してほしい」ということは僕の場合はありません。僕の利き手は右手でもしびれは身体中に常にあります。だからと言うわけではないですが、痛みの程度もその日によって違うので、どちらの腕から通していただくかはその日によって変わります。

僕は生身の人間であって、ベルトコンベアで流れてくる重量やみたらしの量が決まっている団子ではないので、基本的には「こうでなければいけない」はタブーです。

一つめのワードとも連動しますが、型にはめられるのは好きではありません。

僕は、たまたま手足が不自由だからマシーン(電動車椅子)に乗って、ジョイスティックでマシーンを操作しています。

たまたま言語(話すこと)が不自由です。自分の声と言葉で伝えることができればいいなと思うこともなくはありません。

でも、スマホやタブレットがあれば、みなさんと同じようにお話することができます。

不自由な手でどうやってスマホやタブレットをスクロールしたり、文字入力をするのか、疑問に思った方はどうぞ僕に話しかけてみてください。

僕のモットー②は「人の色眼鏡で自分を見ない。自分の事は自分で見たらいい」です。

最後のワード

「患者と一緒に泣くことができる
患者が苦しいときは僕も苦しい」

喜怒哀楽を共有できる人が身近にいると自己の存在感を自覚することができます。

「患者と思いを共有すること」これこそが医学の原点だと感じました。

最後に話された「自分の感覚を信じること」さとちゃんが言った「自分が『ぶれていないこと』を再確認できた」とはこのことではないかと僕は思っています。

石川信義先生、ありがとうございました。

これから全 15 回。

先入観や常識にとらわれない発想を多彩な講師の先生方から学ばせていただきたいと思います。

ゆき注：ライシャワー大使はその場で「殺された」わけではなく、病院で輸血された血液のために血清肝炎になり、療養が長引いたのでした。